

「出京」小考

——中世和歌における詩的〈コスモス〉の形成——

川平ひとし

右の副題に云う「コスモス」とは、物理的な空間の謂であると同時に、ことばの形作る世界、あるいは言語表現によって成り立たしめられている時空や宇宙を指している。本題に示したところと合わせて趣意を言えば、小論では、中世和歌における時空の広がり、ことにその形成史の一側面について、「京」という空間とのかかわりを通して——現実の都市空間としての「京」と、観念の内昇華され、そしてことばとして定着された文学的・言語的な時空としての「京」とのかかわりを探ることによって——考えてみたい。「出京」という言葉は右のような構想に対して幾つかの示唆と、考察を進めるための糸口を与えてくれるのではないかと思う。

一 二つの視座、二つの視線

大和を中心とするコスモスの問題はしばらく措き、平安京成

立以後の問題について考えたい。

平安京の固定してのち、〈京〉〈都〉の内側を住みかとし根拠地ともしていた人々にとつて、「出京」すなわち「京」を離れ「出」ることは常に或る種の抒情を促される経験であったに違いない。「出京」の情は、あたかも「入京」すなわち京洛の「ふるさと」に帰り着きえたことにとともなう安堵と喜びの情に相応するものであったと言つてもよいであろう。このような「出京」にまつわるリリズムは、都や都人との別れの境域である諸方の「口」や「関」に特有の詩的連想を帯びさせたものと、底で深く繋がっていたであろうし、さらには羈旅歌や歌枕表現を支えていた空間意識とも密接に結びついていたはずである。

視点論の次元で言えば、「出京」して都を去る主体にもたらされる抒情は、京の「内」にある視点、やや具体的に言えば京の「内」を観念・感覚の拠り所とする〈視座〉と、京の「内」か

ら「外」へと向かう〈視線〉とによつて裏打ちされていたであろう。重要なのは、こうした視座や視線は単に特定の地点において一回限り生起するのではなく、都を去る者の言わば内なる座標軸として保持され続けてゆくという点である。先ほど挙げた「関」の場合で言えば、「出京」にともなう視座と視線は、京を去り異郷へ赴くべく境としての「関」を越えて行く——言葉をもじつて言えば、「出京」とは「出郷」であり「出境」である——際の、古巣に呼び戻されるような思いや、未知の世界へ向かう好奇や流浪漂泊の気分などが綯い交ぜになつた情趣を生むのであるが、それは、たとえば単に「逢坂関」などの境界にある地点でのみ萌すのではなく、赴く先の「関」ごとに新たな「出京」のリリースムの形をとつて幾度も再生、反芻されえたとである。さらに言えば、そうした内なる座標軸の上に据えられた視座・視線は、果てには、出京する主体の現つた行為や生まの体験そのものに止まらず、必ずしもそれに媒介されずに、言語表現の時空のもとで設定、仮構される表現上の仕組みともなるのである（この点、後述する）。

ただし右に述べたのは、〈京〉と、〈京〉の圏外の「鄙」へ続く異域との連関の中で捉えられるときの〈出京〉である。一方、「出京」には右とは異なる、もう一つの連関のもとでの方向と形が存在する。それは、〈京〉の内側すなわち洛中と、洛外の領域そして北・東・西の山々とその麓辺りへ続く空間との連関、

簡略に言い換えれば、

京洛／郊外

の連関のもとで云われるときの〈出京〉である。この第二の連関における〈出京〉には先述したところとは別途の、注意すべき脈絡が存在している。すなわち、「出京」の語を、「京ヲ出ズ」ではなく「京へ出ズ」もしくは「京ニ出ズ」と訓ずる場合の脈絡がそれである。京の内側に座標軸のある「京ヲ出ズ」に対して、「京へ出ズ」「京ニ出ズ」の方の根拠地と座標軸はむしろ京の外周部、縁辺部にある。「京へ出ズ」「京ニ出ズ」とは、京洛を繞り取り巻く郊外の視座から、あたかも〈京〉の空間そのものを対象化するように、京の「内」へと視線を向ける行為・身振りに他ならない。

すなわち「出京」には、「京ヲ出ズ」と「京へ（ニ）出ズ」の二つの動作の方向がある。この二種の形を、強いてテニヲハを基軸として切り取れば、「出京」には、

「京ヲ出ズ」の系列……………ヲ系の「出京」

「京へ出ズ」もしくは「京ニ出ズ」の系列……………へニ系の「出京」

の二系列が存在すると言つてよいであろう。

さて、この二系列に応じて、両様の視点、二系列の視点の様態が存在していることになるはずである。さらに先述した二つの連関とも結び合わせて、私たちの見取図を次のように表示することができるかも知れない。

〈出京〉の連関・系列と視点の形態

(連関)

		京洛／異域	京洛／郊外
(系列)	ヲ系	A	a
	へ二系	B	b

単に理論的に設定しうるばかりでなく、私たちは、A、a、B、bのような、連繋し合いながらも互いに異なる視点の形態を具体的に辿ることができるに違いない。小稿で考えてみたいのは、これらのうちの就中bの形態、すなわち、京洛／郊外という連関のもと、「京へ出ズ」「京ニ出ズ」という動作の方向でもたらされるところの視点(視座や視線等々)と表現の問題、言い換えれば、京のマージナルな外部の地点にあって、「外」から「内」へと「京」を視る眼とその表現のあり方の問題についてである。

二 たたとえば鷹ヶ峯から

右に示したbにおける視点の形態をもう少し具体的に見定めよう。

時代を江戸初期にまで下げて、一例として洛北鷹ヶ峯に栖を設けた本阿弥光悦の場合を考えてみたい。

現存している光悦の自筆消息は光悦と周辺の人々との交流・交渉の様を如実に伝えて興味深い³が、それらの中には「出京」の語を含む次のような消息も見られる。

牡丹ウスイロ復巻重

御懇情ニ候、出京之

節尚面ニテ可申候、

恐惶謹言

三月十六日

光悦(花押)

鷹ヶ峯徳友齋

(切封)土一郎左様

光悦

人々御中

右は、光悦の号「徳友齋」に施されている肩註によって、鷹ヶ峯から発信されたことの明らかな例である。牡丹や「復」を贈り届けた相手の芳情に感謝するとともに、いづれ「出京」すなわち洛中へ出かけた節に、面謁して直かに礼を申し述べたいという意志を伝える挨拶の書状だと見てよいであろう。同じような「出京」の例は、「八朔為御祝アワヒ十ヶ」を送って寄越した常成への礼状に「二三日中、出京可申」云々とあり、また江戸より到来の鮭を養子の光瑳の許へ送った際の「晦日朔日時分可令出京候」云々という文辞にも見られる。他に、

嵯峨へ参数日逗留仕、罷帰候、近日致出京、御見廻可申上

候

(九月六日「板倉侍従」宛)⁶

其晚可令出京候間、以面上可申候

(十八日「五十嵐太兵衛」宛)⁷

などを捨うこともできよう。

こうした「出京」の語は、親しい者たちとの折々の交じわりの中で恐らくことさら深甚な意味を籠めて記されたのではなかっただろう。しかし、むしろ意図的に構えられたのではない、こうした物言いの中におのずと光悦らが暗黙のうちに共有していた空間意識は滲み出ていよう。すなわち右に示した書簡どもの中で「出京」と云われるとき、〈京〉は赴いて行くべき彼方にある空間であり、翻つて光悦の在る鷹ヶ峯こそは、此方から〈京〉を見遣る眼の拠り所であつたことは明瞭であろう。「出京」という語は、光悦の根拠地——元和元年（一六一五）移住以後の——たる鷹ヶ峯における〈視座〉の在りかと、そこから〈京〉へ差し向けられる〈視線〉の行く方を告げる徴標ですらあつた。

ついでに言えば、光悦消息の多くは、現に洛中に在る人々へ（もしくは嵯峨などの洛外の人へ）宛てられたものであつたに違いないが、それらの書状の中で、人々の「入来」「来駕」「来儀」「御出」「来臨」を謝したり、あるいは請い望んでいる場合の光悦の視座も、むしろ鷹ヶ峯にあつたはずである。また花洛のあたりを「京」「京ノ方」と呼び、みずからそこへ赴くことを「愚拙上洛」などと記しているのも、先述した「出京」の場合と同じ空間意識に基づくものに他なるまい。「出京」の周辺にある語彙群もまた光悦の眼の在りかを伝えているのである。

ところで鷹ヶ峯の佳境、境致については、しばしば引かれる林羅山「鷹峯記」や灰屋紹益「にぎはひ草」⁸⁾、「本阿弥行状記」¹⁰⁾

などのこもごも誌すところである。まことに鷹ヶ峯の地は、京の巷を離れ棲むことによつて秘かに心を澄ますことのできる場所であつただろう。この閑寂の地を栖とした光悦に、どのような内面世界が形作られていたかは興味深い問いだと言わなければならぬが、私たちは、「出京」の語を一つの着眼点としながら光悦の消息を繰ることによつて、述べたような鷹ヶ峯という場所が育んでいたであろう内密な空間意識と、そのもとでのおのずと獲得されていたはずの光悦の視座——より分節化して言えば、光悦の視ていた像（視像）やヴィジョン、視座、まなざし、視線——を読み取ることができると思う。

光悦のもとにあつた以上のような、言わば〈縁辺の視点〉の様態——先ほど仮りに表示した「b」の様態——は、もとより近世初期におけるそれ、しかもその一例に過ぎない。たとえは角倉素庵の嵯峨、智仁親王の桂、後水尾院の修学院、あるいは石川丈山の詩仙堂、その丈山との細やかな交渉を伝える「羅山先生文集」に同様に伝えられている長嘯子の靈山、羅山門下の小川俊政ゆかりの長楽寺の別業（「正林」）等々の——「羅山先生詩集」には上記の人々を含む諸人と羅山との交流の場が、「居處」や「遊覧」「會集」「尋訪」「送別」「贈答」等に部類される詩篇の舞台にしばしばなっている——京洛を取り巻く周囲の、平安朝以来の歴史の記憶や連想も幾重にも累積していた場所にあつては、先に見た光悦のそれと同じような視点が豊かに育ま

れていたに違いない。それらの中にあつて、とりわけ光悦消息中の、鷹ヶ峯からの「出京」を語る語には特徴的な現れを窺うるのであるが、「出京」の語の含みもつそうした視点の形態を、中世、それも中世初期あたりに溯つて尋ねてみることに、そしてこの形態は中世的な詩的コスモスとその表現の形成史にどのようなに連繋していたかを溯つて探つてみることに——言い換えれば、「出京」にまつわる〈視点史〉〈表現史〉の変容・展開の、特に中世初期における姿を求めること——以下における所論の主眼はそこにある。

ただし今問題にしようとしている「変容・展開」は、単一の構造のもとでのみ繰り広げられたと捉える必要はない。考えてみれば、王朝の文学的コスモスの生成・定着して以来、私たちが一つの定点として眺めてみようとしている中世初期に至るまでに、コスモスそのものをめぐる視点や表現も多様で多彩な富を蓄積してはたはずである。仮りに、「出京」を着眼点として述べたような見取図を粗々描くことができるにしても、その内部は単一ではなく、幾筋もの流れのもとで、各々の構造をもつて先述の「富」は存在していたはずである。すなわち、それぞれに広がりと深さを湛えた視点と表現の系の寄り集まり、言い換えれば、視点と表現をめぐる諸構造の束を想定しておくべきであらう。

そのように束を成している諸系の一筋々々を手繰り寄せてみるのは興味深い問題だと言わなければならない。そうした諸系

の一つとして早くより存在し、また或る純化された姿をみせているのは、おそらく僧侶たちにおける「出京」の場合ではなからうか。

三 僧たちの出京

多かれ少なかれ都の巷を離れてみずからの営みに従う僧侶たちにとって、〈京〉は常に彼方にある俗なる領域として遠望されるべき場所であつた。そして〈京〉を包み込むように周辺に広がるべき山々——あるいは山々のあわいの谷々——こそは伝教大師が歌い、慈円もまた和するように歌つた「わが立つ杣」、すなわち彼らの拠つて立つ根拠地に他ならなかつた。

その山や谷、そして山・谷に続く郊外の僧たちの栖は、もとより仏者たちの修行と、思索や夢想の場であるが、同時にその場は学芸研究そして文学表現創出と文学研究の場ともなり、やがて処々の地点において小文学圏を——言わば都の縁辺部の文学圏を——形作りもしていた。しかしその点については今は省略しよう。さしあたり重要なのは、そのような根拠地のもとで長い時間をかけて、僧侶たちの視点、特に〈京〉を対象化して眺め遣る〈まなざし〉や〈視線〉や〈視座〉が充実した内質を備えて成熟していったという点である。私たちは、そうしたまなざしや視線が〈京〉についての多彩な視界——パノラマやヴィスタなど——として示された例を、一つの系譜の中で辿ることすらできるに違いない。和歌表現史の中から、この系譜に立つ

最も代表的な例を挙げるとすれば、次の例はおそらくそれに相当するかも知れない。

花ざかりに京を見やりてよめる

みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける

(古今集・春上・五六 素性)

この素性歌は「見渡せば」の歌句をもつ眺望歌とも言うべき歌々の流れの中にあつて、万葉から古今への展開の結節点ともなる位置に立つ一首であるが、おそらくは、作者自身にとつて親しい場所である東山の花山から、岡々の稜線の彼方に見通すことのできる実際のヴィスタとも全く無縁ではなかつたと想像される。それはともかく、ここには〈京〉の空間を己れの領分とは區別して遠望するという〈視座〉が明確に提示されていると言つてよいであらう。

この場合の〈京〉は優美な景觀として眺められている。しかし、のちの中世の僧の眼は次のような景觀をも捉えている。

見ヲロセバコズエニタマルシラ雪ヲ花宮殿カトラモヒケルカナ

(明恵上人歌集 八七)¹⁶

この明恵歌は、先の素性歌と同じ眺望歌の系譜でみると、すでに使い古された「見渡せば」「眺むれば」の類型句を余人の為しえない自在さで転倒させて、結果的に意表を衝く「見ヲロセバ」という視線を提示している。見下ろされているのは、京を遠く離れて鎮まる梅尾の山中の景觀に違いないけれども、視ら

れているのは、すでに現実にある景觀のみではない。

此山寺ノウシロ二三町許ヲ去テ、一ノ峰ヲシメテ楞伽山ト名ク。ソノ上下ニ二字ノ草庵ヲ立テ、上ヲバ花宮殿ト名ク、下ヲバ羅婆房ト名ク。ソノ因縁ミナ楞伽經ニ出タリ。

云々の長文の詞書と、関連する歌々とを併せて読めば、当の景觀はむしろ觀念のパノラマであり、修行三昧の時空の中で幻視された〈視像〉だと言ふべきだろう。しかも詞書の後段に、

マタ花宮殿ニ乗ジテ無量ノ諸天大衆トトモニ伎楽歌詠ヲト、ノヘテ、山頂ニイタリテ五法三性八識ニ無我ノ法門ヲトキタマフ。ソノヨソヲヒマナコニウカビテユカシケレバ、コノ名ヲツケタリ

とも記されている通り、「見ヲロ」す視線の主は山頂にある幻視された釈迦如来であり、同時に「ソノヨソヲヒ」を想い浮かべる明恵自身でもあつた。

仮りに右の二首をもつて強いて表現史を束ねるとすれば、山々谷々を根拠地とする僧たちの視座は、平安から中世へと豊かな視像をもたらしつつ続いていたことになる。この系譜はおそらく中世以降へも続いていたはずである。

ちなみに、和歌表現の例からは逸れるが、前節でとりあげた光悦と同じ鷹ヶ峯に源光庵を開いた卍山道白に、次のような詩句を見出しうる。

縛¹⁷ 繭鷹峯¹⁷ 蔵¹⁷ 一身。洛城雖¹⁷ 近隔¹⁷ 紅塵。

(鷹峯卍山和尚広録卷二九・序「鷹峯源光菴縁起序」)

探勝孤峯絶頂遊。人天交接兩悠悠。遠望鯨海盃當眼。

近仰鵬霄盆覆頭。數朶白雲垂玉柱。一丸紅日輓金毬。洛中盃盃午炊氣。只見香煙爐上浮。

(同卷四〇・詩偈七言律「登鷹峯絶頂」)

京の縁辺の場所に在つて実地に京の景観を眼にしながらも、その都から隔絶した自己の立脚地点——しかしその栖ももとより「幻寓」の場として捉えられるのであるが——を一つの理念化された視座として表現していると読解されるであろう。宗祖道元の生きた中世の時空を己の時空に重ね合わせるように生きたと言ふべき、この近世初期の禅僧にも、古代・中世と続く僧たちの視座が変ることなく保持されていることを知りうるのである。

このように觀念化され理念化された視座のありかたは、僧たちがみずからの栖に籠つて敢えて巷に赴かないことを、京に出でず、出京せず、などの否定形の身振りではしばしば表現するところにもよく現れていよう。すなわち、明恵の場合で言えば、元仁元年ノ秋ノコロヨリ山寺ニコモリキテ、ヒサシク洛中ニイデズ。(61の詞書)

などの言表がそれである。まことに僧たちは中心の地を離れて在るマージナルな根拠地に最も自覚的な者たちであつた。

しかしながら、山々谷々に在る僧たちは常に〈京〉へ出で行かないまま居るわけではなく、時あれば世俗の方へと〈山〉を

下りもする。ただしそれも、

(三月) 十四日の夕に、僧は山よりおりて、ふもとにあつたり、俗は月に乗て寺にゆく

(三宝絵詞・下、比叡坂本勸学會)

のような象徴的な儀礼の中の下山ではなく——右の例も〈山〉は理念化された聖域であることをよく伝えているが——僧たちの日常性の中では(再び明恵の家集の例で言えば)先掲の「洛中ニイデズ」という時間の傍らに、京洛に赴く「京上」(2・10の詞書。ただし10は石清水八幡へ行き、改めて京へ上る例)の折々があり、また、

佐渡前司藤原親康、高雄ノ住房ニキタルベキヨシヲ申二、ソノコロラヒ雨シキリニフレバ、ヨモト思ヒテニハカニ京ヘイヅルヒマニ、草庵ニキタリテテラケリ。

イカニマタミヤコノ空ニイデアラムタノメシコロラ山ノハノ月(3)

の例に見える通り、僧たちの日々の営みや世俗の人々との交渉の時間の中にあつて、京は時おり行き通ふべき場所でもあつた。〈山〉と〈京〉とは現実の世俗的な紐帯によつて結びついていたのである。

そして現実の都市史の変転につれて、寺々のある郊外の圏域と洛中の世界とが——先掲の三宝絵の伝える山と俗の関係のよう——象徴化された垂直軸のもとで相関性を保ちながらも、むしろ平面的な同一地平のもとで相互に行き通う場所となると

き——言い換えれば、郊外の寺々が都市史の中で安定した場所として固定するにつれて——僧たちによる「出京」は、ごくありふれた日常的な行為ともなったはずである。而して私たちは、郊外の処々方々の地点から京の内へと赴いて来る僧たちの行為やその姿を、諸種の資料の記載の中から——〈僧たちの出京〉の用例群として——拾うことができるに違いない。⁽²¹⁾ 先記の用語で言えば、「へ二系」の出京のうち、「b」に属する類である。

ついでに言えば、用例群の中には、僧たちの根拠地が遠隔地に在つて、京へ到り着くまでに相当の時日を要する「出京」もある。それらは「b」よりむしろ「B」に含めるべき「出京」と呼ばれるべきだろう。また僧侶たちに限らず、たとえば京洛から程ない距離にある北野の⁽²²⁾ 祠官らが洛中に赴く行為も、しばしば「出京」と表現されているのも注意される。

とりまとめて言えば、僧を始めとする宗教者たちにとつて、郊外から山々谷々に続く彼らの根拠地から京洛へと赴く〈出京〉は、いつも理念・観念と象徴的な意味を帯びた行為であり、同時にまたそれは、平生の日常的な行為そのものでもあつた。聖俗の身振りの共在する営みとして、仏神にかかわる者たちの〈出京〉は存在していたのである。以上のような〈出京〉の身振りと、そこに孕まれている視座については、「出京」をめぐる和歌表現について検討する後段において、もう一度想起することにしよう。

四 諸系譜——視点の深度

先にも述べたように、前節で瞥見した〈僧たちの出京〉もまた〈出京〉にかかわる諸系譜の中の一つである。これ以外にもすでに王朝以来の表現史は、幾つもの系譜のもとで〈出京〉にまつわる表現の富を築き上げていた。その富を仔細に点検するのではなく、ここでは、それらのうちの二三の系譜とその様相を、かいつまんで確かめるに止めておきたい。

(1) 中納言、かく世のいと心憂くおぼゆるついでに、本意とげむとおぼさるれど、三条の宮のおぼさむことにはゞかり、この君の御事の心ぐるしさに思ひみだれて、かののたまひしやうにて、形見にも見るべかりけるものを、したの心は、身に分けたまへりとも、移ろふべくもおぼえざりしを、かう物思はせてまつるよりは、たゞうち語らひて、つきせぬ慰めにも見たてまつりかよはましものをなどおぼす。かりそめに京にも出でたまはず。かき絶え、なぐさむ方なくて籠りおはするを、世の人もおろかならず思ひたまへることと見聞きて、内よりは、じめたてまつりて、御とぶらひ多かり。

(総角)

宇治で、大君の死をみとつたあとの薫は、みずからの出家を思いながら、女三の宮の心中を慮り、また遺された中の君と自身との、こののちのかかわりを思いやる。その描写の中に傍線部のような用例を見出しうる。思えば作中に設定された〈宇治〉

という場所は(視点について言えば)、都に在ってかしの人に想いを馳せ、一方ここからかしに在る都の人を想いやる者たちの、相互の視線が交錯する場所である。幻想のまとわりつく視線が到り着く先であり同時に幻想の生ずる視座としても機能する。それゆえ京を出て宇治へ赴く「出京」も、逆に宇治から京へ赴く「出京」も、おのずと特有の意味を帯びた身振りとなる。(1)は後者の「出京」、ただしその身振りは否定の意志として示されている。愛しい者を失った者が(その引き受け方は様々であるにせよ)ひとたびは味わう喪の悲哀の中で——形の上では「限りあれば、御その色のかはらぬ」ままながら——暫くは宇治から出ようとしてもしない薫の姿が表現されているのである。先に見た僧たちの「出京せず」という身振りは、信仰の根拠地に留まる自己を確認することであったが、薫のそれは、己の内面と生のゆくえを見つめることの証であった。へ京の郊外の、現実に見ることの出来ないさらに奥に設定された「宇治」の空間は、(1)に見る薫がそうであるように、身を潜めて魂の疵を癒すことのできる場所である。そして、そのような「宇治」を視座にもつ作中人物の心的な時空の中で、へ京は、引力と斥力のせめぎ合う世界として対象化されることにもなるだろう。

(2)京にかへりいづるに、わたりし時は水ばかり見えし田ども、みなかりはて、けり。なはしるの水かげ許見えし田のかりはつるまでながみしにけり

〔更級日記〕

(2)は、上総から上京して住み続けた洛中の住居、しかし「都の内とも見えぬ所のさま」の邸から、「四月つごもりがた、さるべきゆるゑありて、東山なる所へうつろ」ったのち、半年程経て、秋の頃再び洛中へ帰ったことを叙べた条りである。傍線部の「京にかへりいづる」は、京へ帰るべく表へ出てみると、の意とも取れなくはない。しかしこの場合の「かへりいづる」は同じ作品中の、

太刀はきて、しりに立ちてあゆみ出づるを

いと黒き衣のうへに、ゆゝしげなるものを着て、車のともに、泣くくあゆみ出でてゆくを

などの、一時の所作を表す語とは異なり、むしろ「京にかへる」帰京の意と、「京にいづる」出京の意とを兼ねた複合動詞なのではなかるうか。そう解しうるとすれば、右もまた「出京」にかかわる用例に加えることができる。しかし、それにしても「京にかへりいづる」というとき、視座はどこに置かれているのだろうか。「京にかへり」と言われるのだから、帰属する本来の視座は京の内にあるはずだが、先の言い回しに「京にいづる」の意も籠っているのだとすれば、「京にかへりいづる」には、京の外の(仮りのものであったにせよ)一時期は保持していた視座を手放して、京の内を指して赴くという意識(そして視線)も含まれていたであろう。となれば作者——生身の主体、そして表現主体でもある——の真の根拠地は何処にあるのだろうか。

ちなみに、作者は先掲(2)のち「十月つごもりがたに、あか

らさまにきて、「先の同じ地の冬の景色を眺めてもいる。さらに翌年は「たびなる所にきて」、また「秋のころそこをたちて、ほかへうつろひて」のごとく、日記の中では、和歌を飛石伝いに配しながら場所の移動の叙述が続いている。

そもそも作者は、京から東国へ下り、「十三になるとし」京へ上るのであるが、その少女期ばかりでなく、帰京後も、先記のように「東山なる所へうつろ」い、再度東国へ下向した父の帰京を待ち、「西山なる所に」家族ともども「渡り」、さらにまた西山から「京にうつろふ」というように、作者の視座は常に定まることなく移動していた。言わば視座の不安に曝されていたのであるが、それは本日記に独特の視点のあり方をもたらしていると思われる。(2)の「京にかへりいづる」にも、そのような移動する視座の不安や寄るべなさがおのずと影を落としていたかも知れない。

(3) 『今昔物語集』の記す都市の情景の中に、私たちは院政期における現実の都市空間の混沌を読みとりうるはずである。ただし今注目したいのは、当の現実空間と人の実態を復元的に読み取るだけではなく、むしろそれらの様を、一つの文学的なコスモスの坩堝として描き、語っている主体の視点のあり方についてであり、今昔の中の「京ニ出ズ」にはおのずとそれが現れていると思われる。

今昔は、様々の目的をもつて「京」を出、そして京へと赴い

て——時には野望や企みを抱いて——来る者たちの姿を、種々の言い回しで表現している。それらの中から、「京ニ出ズ」と訓ぜられる例の幾つかを拾って、それぞれ、巻・章段数、「出京」する主体、「出京」の起点（どこから京へと出るのか）、その際の表現、の順に列記してみよう。

巻二・三八 円久ト云フ僧

比叡ノ山ノ西塔

「京洛ニ出テ、経ヲ読ムニ、其ノ思エ高ウ成テ」

巻一五・一一 仁慶ト云フ僧

比叡ノ山ノ西塔

「本山ヲ離レテ、京ニ出テ住ム間ニ」

巻二八・三六 義清阿闍梨ト云ヒシ僧

比叡ノ山ノ不動寺

「京ニ出ル事モ无クテ、年経ルマ、二八、房ノ外ニダニ不出ズシテ」

巻二九・二八

近衛ノ中将（家高キ君達ノ年若クシテ形チ有様美麗ナル）

阿弥陀ノ峯ノ北ナル所

「京ナドヘ出ル事ハ否不有ジ」（女の詞）

巻三〇・三

浄蔵大徳

鞍馬山

「其ノ夜忍テ京ニ出テ、彼ノ病者ノ家ニ行テ」

巻三一・一五 京ニ有ケル若キ男

北山ノ辺

「京ニ出タマヒタランニ、努々、此ル所ニ然ル者
ナム有ツルトナ不宣ソ」(女の詞)

「京ニ出ズ」と言われるときの動作の主は、右六例中の四例は僧であり、その起点もおのずと叡山、鞍馬山などの僧たちの拠つて立つ山々である。これらにはまさに僧たちの出京が記されている。しかしそれを語る際の視座は僧たちの側のそれではなく、また先に見た僧たちの出京に色濃く現れていた理念や觀念からは離れて、むしろ語られているのは僧たちの行為自体であると言うべきだろう。また当然ながら場面の展開につれて登場人物の女の詞と重ね合わせ、一体となつて「出京」は語られる。これらの諸例と、へ京へに出入りする夥しい者たちの群像を、京ニ上(昇)ル、京ニ上ボス、京ニ上グ、京ニ入ル、京ニ行ク、京中ニ行ク、京ニ御ス、京ニ罷ル、京ニ至ル、京ニ返(帰)ル、京ヨリ出ズ、京ヨリ下ル、京ニ下ル⁽²⁶⁾のような多様な言い回しで捉えていることを考え合わせると、今昔の作者は、都市をまさに舞台として、単一の固定した視座には決して還元できない、きわめて入り組んだ諸視線に従つて語りを繰り広げていることが知られる。

こうして(1)の源氏物語は、テキストの網の目の中に、「出京」にもなう情動を編み入れ、(2)の更級日記では、書き手である作者の心身の深層が震となつて滲み出るといふ形で「出京」に

ともなう視線が表出され、また(3)の今昔物語集では、現実時空の増埒の中で蠢く群像を、動態的に語る多重の視座の交錯が見られるというように、へ京への表現は幾つかの領域において、それぞれ或る深度をもつた視点を築いていたのである。王朝における和歌表現史の傍らに、すでにこのような視点史の水準が達成されていたと考えられる。

五 縁辺視座とその表現——郊外へ、郊外から

和歌表現におけるへ京への(先に類別した) b の様態は、平安和歌史においては後出の様態である。b に先立って早くよりあつたのはむしろ B の様態である。すなわち洛中の拠り所とする空間から郊外へ、内から外へと赴こうとする行為や指向、それを通して得られる郊外のコスモスの景観は、

野、野辺、里、山里、山、山辺、深山、奥山

等々の空間とそれらを背景とする素材となつて、すでに古今集以来、一筋の流れをなしていた。それらはへ京へに棲む都人たちのまなざしと視線によつて見出され累積されたモチーフ群であつた。オギユスタン・ベルクが明快な命題をもつて述べているように、なるほど「日本では都市文明の最高度の形態が自然を指向する⁽²⁷⁾」のであろう。

和歌表現に加えて王朝漢詩文の表現もこの指向の形成に与つていた。洛外の所々の寺院や別業や山荘を創作行為の場として、それらの場へ赴いて行く途上や、当の場の景観そのものを素材

として、視野の開拓が試みられていた。おのずと「出京」についても視線の富と呼ぶべきものが醸成されていたと言つてよい。たとえば、

出紫闥而東望 山岳半挿雲根之暗 躋翠嶺領而西顧 家鄉
悉没煙樹之深 (和漢朗詠集・下・眺望 尊敬)

の場合、「紫闥」を王宮の門、都城あるいは京、東の「山岳」は東山、「翠嶺」は叡山と解すれば、「倭漢朗詠集抄注」に云う、
下句ハ東山ニノホリテ宮コヲカヘリミレハ、ヤトノコスエ
ワツカニミユル意也

云々や、近世の『和漢朗詠国字抄』(高井蘭山、享和三年刊)の、
東山に登、西に都を顧れば、煙のひま樹の間に家居わづかに見ゆる

の釈も納得されよう。右は「出京」の道々、振返つて眺められた景観の描写であるが、このような京華を出、花洛を辞して郊外に赴くという趣向のもとで得られる景観と視線は「ヲ系」の出京の豊かな表現群を生み出していたのである。

さて、漢詩文の流れに媒介されて、また相互の相乗作用によつて、郊外における詩歌詠作の場とその圏域がどのように形作られていたか、それらを場としてどのような表現史的な状況と水準が和歌史においてもたらされていたか、それをどのような誌的記述と史的叙述によつて捉えるか、などの課題については平安和歌史の側における追究に委ねよう。ここでは、平安末期に至る和歌史の中に、述べたような、すでに様式化されすらし

ていた「ヲ系」の出京に並行して、と言うよりむしろ「ヲ系」から「へ二系」の出京へと転位されるとも目される様態が次第にせり出してくることに注意したいと思う。以下のような「出京」の諸用例は、そのような緩やかな変容の様を伝えているのではなからうか。

ゐ中に侍けるほどに、京に侍けるおやなくなりければ、
急ぎのほりて、山里にて、故郷を思ひおこせて誑侍ける
(い)なにかいまいそがみやこにはまつべきひともなくなりけり

(後拾遺集・哀傷・五七二 大江嘉言)
くらまより出侍ける人の、月のいとをかしかりければ、
鞍馬の山もかくこそは、など思出けるを聞て

(回)すみなるるみやこの月のさやけきになにかくらまの山はこひしき

(後拾遺集・雜一・八五一 齋院中将)

かよひける女、山里にてはかなく成にければ、つれなく
ともりゐて侍けるが、あからさまに京にまかりて、曉
帰るに、鳥なきぬと人々いそがし侍ければ

(い)いつのまに身を山がつになしはて、みやこをたびとおもふならん

(新古今集・哀傷・八四八 顯輔)

としころの人かくれにしかは、山さにとわたりてとかくのことはするに、すゑにもなりぬれば、ことさらに京に

いてそめてあか月かへるに、とりなきはへりぬなと人の
いそかせは

(一)いつのまに身を山かつになしはて、みやこをたびとおもふな
からん

わさとのことゝもはて、み名人（やま）裳へいてぬれと、わか
身はなほしはしと思ひてあるに、しくれのせしひ、中将
のうへのもとより

(二)たれもみなはなのみやこへちりはて、ひとりしくるゝ秋の山
さと

(左京大夫顯輔卿集 四〇・四一)

上西院の女房、法勝寺へ花見にまかるときゝて、京へい
てたるけるつひてに、したしき女房のもとへ遣ける

(三)花みにとぎくにこゝろのたくふかなすかたはこけにやつれは
つれと

(寂然法師集(寂然III) 雑・八一)

法師になり後、京に出て、故郷月と云事をよめる

(四)ふるさとの宿もる月にことゝはむ我をば見ずや昔住きと

(治承三十六人歌合・歌仙落書・新古今集(雑上・一五四

九)

これらの諸用例の伝えているのは、都の外の、郊外にある視
座、一時の滞留地、そしてもはや〈京〉からは切り離されてあ
る、郊外の根拠地から、〈京〉へと赴いてゆくという〈身振り〉
である。この〈身振り〉が一個人の一回きりの行為ではなく、

見られるように繰返し用いられる身振りとなり、やがて表現上
の装い、仕組み、仕掛け、そして装置ともなる様を、これらか
ら窺いうると思う。平安末期、コスモスの表現の一角に、この
装いが一つの表現粹——担い手たちの共同の想像力と気分とも
言つてよいものに支えられて——として定着してゆくのであ
る。かくして〈出京〉の諸用例は、〈京〉〈都〉を外から対象化
して、真近かに見、遠く眺め、そして遙かに思い遣る〈まなざ
し〉と〈視座〉のもとで、テキスト中のコスモスを形作つて
いた。「みやこ」の語を詠み入れた夥しい数の用例群は、そうし
た〈コスモス〉の形成と定着の様を具体的に伝えているのだと
思われる。

さて以上のようなコスモス表現の粹が定着していたのだとす
れば、その粹の中で、個性や個人の様式はどのように展開され
たのかを、私たちは問うことができるだろう。

たとえば西行の用例のうち、

ある人さまかへて、仁和寺のおくなるところにすむと

きゝて、まかりたつねければ、あからさまに京にときゝ

てかへりにけり、そのゝち人つかはして、かくなんまい

りたりしと申たりける返事に

(五)たちよりてしはのけふりのあはれさをいかゝおもひし冬の山

さと

返事

(リ)山里にこゝろはふかくいりなからしはのけふりのたちかへり
にし

この歌もそへられたりける

(ヌ)おしからぬ身をすてやらてふる程になかきやみにや人まよひ
なん

返し

(ノ)よをすてぬ心のうちにやみこめてまよはんことは君ひとりか
は

(山家集(西行I) 七三六〜七三九)

高野のおくの院のはしのうへにて、月あかゝりければ、
もろともになかめあかして、そのころ西住上人京へいて
にけり、その夜の月わすれかたくて、又おなしはしの月
のころ、西住上人のもとへいひつかはしける

(フ)ことゝとなく君こひわたるはしのうへにあらそふ物は月の影
のみ

かへし

西住

(ク)おもひやるこゝろはみえてはしの上にあらそひけりな月の影
のみ (同一五七・一一五八)

高野にこもりたりける人を、京より、なにごとか、又い
つかいつへきと申たるよしきゝて、其人にかたりて

(カ)山水のいついつへしとおもはねは心ほそくてすむとしらすや
(同一五〇)

(キ)(ク)の一連の贈答には、遁世者たちにとって「京」は象徴

的な意味をもつコスモスであることが基盤にあるであろう。翻
つて遁世者たちの場こそは日常の現実空間であり、かつ根拠地
でもあることを、(ク)から読み取りうる。そして(カ)は、「こもり
たりける人」としての西行たちにおける視座——もはや京へと
出京してくる彼方の人を待ち迎える人々の視座とは逆のヴェク
トルをもつ——が深く共有されていたことを、「出づ」という語
の担う深い意味(後述)とともに、告げている。以上のような西
行歌における(身振り)は西行的とよぶ他ないテキストの時空
を、私たちに想定させないではおかない。そしてまたこの身振
りは、のちのち「花洛に出侍りし時」(『撰集抄』巻五・第十五
「西行於高野、奥造人」事)。ただし「いでかへりし時」の異
文あり)とみずから語る、もはや都の外の人である「西行」と、
幾度も重ね合わせて受容されることになるであろう。

私たちはまた、西行のみでなく、テキストの中に独自のコス
モスを作り上げている、もうひとりの都の外の人、式子の様式
の例を想起することもできる。あるいは、

ヲノツカラミヤコニイテ、身ノ乞匈トナレル事ヲハツト
イヘトモ(『方丈記』)

云々と記す(もしくは語る)日野山の庵の主の場合を考え合わ
せてもよい。さらにまた、定家『明月記』の用例群——落外か
ら「出京」してくる僧侶らを含む来訪者たちを迎え、自身落外
へ「出京」し、とりわけ、「出京」して滞在した嵯峨から再び(京)

へ立ち戻ること、「出京」という、すでに私たちには親しい視座のもとで用いているとおぼしい例などを含む——を片側に置きながら、作品世界の中のコスモスの、定家における様相を考へることもできるだろう。ただしそれらの個人の諸様式に関する論は、中世和歌におけるコスモスの表現の初期における姿を、小止みない用例史の動態に即して分析することから全く離れては存在しないと考へられる。こののちの課題としたい。

六 むすび

現つゝの〈京〉に都市史の中世における現実と状況があつたように、觀念の内のそして表現されたものの時空にも、おのずと中世性を認めうるのではないか——小論における一つの見通しはそれであつた。「出京」の語を手掛りとして右の見通しを種々の観点から検討してみたのである。述べてきたように〈出京〉はまことに示唆的であると考へられるのであるが、その示唆性を支えている理由の一つは、「出京」という行為を叙述する表現の中に、この行為に従う者の意志の深さとともに、その拠つて立つ視座と空間意識とが顕わになつてゐる点である。もう一つの理由は、おそらくは〈出づ〉という語のもつ象徴的な、あるいは比喩としての意味の深さにあるのではないか。中世における「出づ」は一面で、俗塵を振り出て聖なる領野と見定めた世界へ逸散に進み入るといふ行為を意味しているが——〈走る〉という語の含みもつてゐる王朝と中世における深層を稲田利徳

が明らかにしてゐるのを想起したい——「出づ」という一語の動詞が担つてゐる、そのような単なる空間的な移動の意を超えた意味の深さは、先に挙げた諸用例の幾つかにもおのずと滲み出ていると思はれる。

右に述べた二つの理由は、結び合いながら、〈出京〉に籠められてゐる〈京〉と〈京〉の縁部のコスモス——ことに詩的なコスモス——との相関性を考へるための、一条のスポットライトを私たちにもたらしめてくれるのではなからうか。

ただし論をむすぶにあつて、屢々用いてきた〈コスモス〉という觀念の、ここでの用語法について次のように簡単に整理しておきたい。

- (a) 現実のコスモス
- (b) 認識の中のコスモス
- (c) 語りの中のコスモス
- (d) テキストの中のコスモス

たとえば「出京」というとき、実際に存在してゐるのは(a)の現実の時空である。(a)は、(b)(c)(d)の書き手の想像力によつて築き上げられた時空と区別される。そこで、(a)と次元を異にする(b)(c)(d)を、(a)の「現実のコスモス」に対して「詩的コスモス」と呼ぶことにしよう。詩的コスモスは、書き手の、認識から表現へ至るプロセスを通して、ことばとして作品化されてゆくプロセスに他ならない。しかもこの(b)(c)(d)のプロセスは常に(a)に根

差し、かつ(a)に立ち戻って像を作り上げてゆく。したがって(a)と、(b)(c)(d)の詩的コスモスは、そして(a)(b)(c)(d)はいつも相互滲透し合う、可逆的ですからあるプロセスとして想定される。さらに(a)(b)(c)(d)は、第五の項、

(e) 読み手の認識の中のコスモス

によって参照、追対驗され、また増幅され、ときには歪曲されながら受容されるだろう。〈コスモス〉にかかわる表現史は、以上のような諸次元と諸過程とが寄り集うところに存在しているのだと考えられる。

さて小論では、仮りに右のように図式化しうる見取図をもつて、中世和歌における詩的コスモスの形成史の一面を〈出京〉にまつわる表現に着目することを通して検討しようとした。ただし、中世文学における〈詩的コスモス〉は、和歌の領域に限って見ても、ここで眺めた〈京〉のコスモスばかりではもとよりなく、〈京〉から、水平的に、また垂直的に遙か彼方にある他界や異界——想像力とことばによるほか往く手立てはないところのコスモス——へも至る広がりと深さを湛えて（現に作品化された個々の表現として）存在している。その広がりと深さを、一筋ごとに辿ってみるのは興味深い課題だと言わなければならないが、ここではその一断面——表現史的状况の一断面——を、〈出京〉の語を通路として、また分析のための概念の用語法に關する私見をも確かめながら眺め、考えてみた。

註

- (1) 時間と空間は常に「時空的」に存在しているはずである。現実の都市のイメージや、文学における都市のコスモスのあり方も同じであろう。「私たちは、時間・場所の中に生活している。」「環境のイメージを空間と時間の両面から——つまり、時間・場所として考えなければならぬ」(ケヴィン・リンチ「時間の中の都市」(一九七四 鹿島出版会)346頁)。
- (2) 境、ことに都市と境の連関についての論は少くない。以下の所論と接点をもつのはジョージ・パークワート「まち」のアイデア(前川道郎・小野育雄訳(一九九一 みすず書房)、保坂陽一郎「境界のかたち——その建築的構造」(一九八四 講談社)、都市デザイン研究体著、彰国社編「日本の都市空間」(一九六八 彰国社)、五味文彦編「中世を考える 都市の中世」(一九九二 吉川弘文館)、赤坂憲雄「方法としての境界」叢書・史層を掘るI(一九九一 新曜社)など。
- (3) 増田孝「光悦の手紙」(一九七七 河出書房新社) 図版51。
- (4) 「光悦と寛永文化」(一九八六 承天閣美術館) 図版56。
- (5) 「セレクトチャーミュージウム名品展」図録(一九九一 センチュリー文化財団) 所収。
- (6) 林屋辰三郎他編「光悦」(一九六四 第一法規出版) 光悦消息目録109。(7) (6)目録17。
- (8) 寛永七年(一六三〇)作。「在洛外而人不遠、非市中而徑有以、媒、不_レ江湖_ニ而有_レ清流、此乃鷹峯之境致也」。「羅山先生文集卷十七・記三所収。寛永三年(一六六二)刊本による。
- (9) 巻下冒頭条参照。天和二年(一六八二)刊。森鏡三・野間光辰・朝倉治彦監修「新燕石十種」巻三(一九八一 中央公論社) 所収。
- (10) 正木篤三「本阿弥行状記と光悦」(一九四五 大雅堂、一九四八 芸艸堂出版部、一九六五 中央公論美術出版) 所収参照。
- (11) 作家たちは、光悦に、「とはいへ、鷹ヶ峯からながめた風景は素晴らしい」「まさに「近代の朝明け」を告げるさわやかな風景にはかならなかつた」(花田清輝「本阿弥系図」「日本のルネッサンス人」(一九七四)花田清輝全集15(一九七八 講談社)と語らせ、また、某日、

光悦の見た風景とともにその心情を次のように語らせてもいる。

私の本阿弥辻子の本邸から母の葬儀を終えて鷹ヶ峰の家に戻ったのはその年の秋おそくであった。すでに野は枯れ、雲の垂れた遠い京の町へ風が吹き渡つていた。私は道をゆきつくし、町を遠望する丘の外れに立った。そのとき私ははじめて深い悲哀の念が胸をつきあけてくるのを感じた。

辻邦生『嵯峨野明月記』(一九七二)辻邦生作品全六巻5(一九七三河出書房新社)。

(12) 「視点」の概念をより細かく問うべきだと思ふ。川平「軒に夢みる——中世和歌における「視点」——」(『國學院雜誌』92-1 一九九二)でこの点につき仮りに整理してみた。

(13) むろん一方にへ京」などとはかわりなく、僧の営みのへ内」へと向かう視点が存在する。

(14) ケウイン・リンチ「都市のイメージ」丹下健三・富田玲子訳(一九九六八 岩波書店)に、都市をデザインする側の関心事のうち、「視界」として挙げられている諸項を参照。

(15) 石川常彦「新古今の世界」(一九八六 和泉書院 第一部・二、三参照による)。

(16) 「中世和歌集 鎌倉篇」新日本古典文学大系46(一九九一 岩波書店)所収による。

(17) 曹洞宗全書・語録二(一九三二 曹洞宗全書刊行会)。以下の同書の引用も同じ。

(18) 正徳三年(一七二二)「総泉寺略縁起記」の奥書に、
正徳癸巳孟冬晦日 幻「寓鷹峰復古堂中」 七十八翁山白阿「凍筆」塗抹焉

(統曹洞宗全書10 寺誌・史伝 一九七六 同全書刊行会)とある。なお正徳五年、衆に説き示した偈のうちには「老病禍言年八十。元来幻住幻生涯」(広録巻四十九「鷹峯和尚年譜」)とあり、同年示寂の前日(八月十八日)の一偈に「超師超仏。滿八十年。秋風捲地。孤月遊天。無幻幻兮無病病。全身入塔石中蓮」(広録巻八「山城州鷹峯源光菴語」に「臨・滅辞衆」)として載る。右掲の「年譜」等にも)。とある。

(19) 右で引いた卍山道白にも、本人自身の言ではないけれども、次のような姿勢が伝えられている。「居亡何竟退潛「源光精廬影不出」山以壽終焉」(享保十二年(一七二七)の碑陰文。鷹峯卍山和尚広録巻二九・塔銘所収)。

(20) 大日本仏教全書・伝記叢書による。

(21) 洛中の寺々の歴史と呼びたいであらう。伊藤毅「中世都市と寺院」高橋康夫・吉田伸之編「日本都市史入門Ⅰ 空間」(一九八九 東京大学出版会)所収参照。

(22) たとえば「慈尊院当年初而出京也」(「公頼公記」大永七年七月五日条。和田英道「内閣文庫本「公頼公記」翻刻(大永七年)」「立教大学日本文学」68 一九九二)に紹介。紀伊国の「女人高野」の慈尊院からの「出京」を云うか。あるいは勧修寺院の慈尊院流、もしくは仁和寺慈尊院隆遍の流れの慈尊院流の寺院を指して云うのか。「実隆公記」の裏文書中にも、郊外の僧たちの「出京」を伝える例を多く拾いうる。

(23) 棚町知弥「松梅院禪予日記抄——北野社古記録(文学・芸能記事)抄(四)——」(『有明工業高等専門学校紀要』8 一九七二)に紹介される同日記の一部に、「寿官来、酒在之、即同道而出京也」(延徳元年十一月二十八日条)「今日、出京、於宗猷門前、波兵仁対談也」(明応二年三月二十七日条)「今日出京、於梅竜軒、三条西殿致参会、御酒在之」などである諸例。

(24) 「京にかへりいづる」折に見たのは、引用したように「田」の景色であるが、それは「山里」とも記されている住居の表に「いづる」すぐのところには広がつていたのでなく、「四月」の条にすでに言われていたように、「みちのほと」すなわち京と東山の間、途上の景観であったと考えられる。

(25) 黒田敏一郎「今昔物語」にあらわれた都市」(『日本史研究』一六二 一九七二)を参照。

(26) 「京下丸」は山(叡山)から京洛へ出ることを云う例。巻三・三〇、巻一七・四四、巻三二・二三など。これらの下山の行為、その語りに象徴性や理念性は希薄であり、ほとんど垂直的な移動の行為を云う

意に近い。

(27) オギュスタン・ペルク『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』講談社現代新書 (一九九〇) 講談社。

(28) 永青文庫蔵本。『細川家永青文庫叢刊』13 (一九八四) 汲古書院。

(29) 直接には実体的な空間としての場、そして詠作行為のとり行なわれる私的なあるいは共同の場の意。その「場」は同時に、詩や古歌と重ね合わせられて、テキストの中の場ともなるだろう。

(30) 岩波文庫本 (一九七〇) 岩波書店。安田孝子他『撰集抄——校本篇——』(一九七九) 笠間書院) によれば「華洛にいてゝかへりし時」「花洛にいてゝ侍りし時」「花洛に出侍りし時」「花洛に出て帰りし時」「花洛にいてゝかへりし時」なども。

(31) 稲田利徳「人が走るとき——王朝文学と中世文学の一面——」(『文学・語学』112) 一九八九・八) 参照。あるいはまた山に「入る」というヴェクトルの含む深い意味も考え合わせたい。